

Oita Yufumi

**VOL.14**

Hospital

発行 / 2017年4月

大分ゆふみ

病院たより

 大分ゆふみ病院



## 院長ごあいさつ

### 「大分ゆふみ病院の役割とは」



院長 一万田 正彦  
いちまた まさひこ

昨年4月16日に発生した熊本地震から1年が過ぎましたが、いまだ復興半ばの状況であり、被災された熊本県の方、並びに大分県の方には、心よりお見舞い申し上げます。天災というものは恐ろしいもので、突然訪れ、人々の生活や命までも奪ってしまいます。そのような辛い状況にある被災された方が、前を向いて進んでおられる姿には、逆に私たちが勇気を頂く事があります。

その一方、不治の病に罹り、闘病している方も多くおられます。その中でも進行したがんの方に私たちは関わっています。辛い状況の中で、鬱々として過ごす方がおられれば、気持ちを強く持ち、明るく過ごされる方もおられます。

闘病中の方にとっては、何処で過ごすのが良いのかを考える必要があります。最近では訪問診療を行って頂ける在宅支援診療所が徐々に普及し、自宅で療養しながら、医療を受けられるようになりました。このことは闘病中の方が、ご自身の希望に応じて療養場所を選べるようになったと言えます。それでは大分ゆふみ病院の役割はどのようになるのでしょうか？

ここ数年の変化を見ますと、大分ゆふみ病院に入院される方は、がんの治療が難しくなり、一般の医療機関や在宅支援診療所において、標準的な緩和治療・ケアを行っているにもかかわらず、苦痛症状や辛さがあり、症状の改善が難しい状況となって入院されることが増えているのが現状です。それに加えて、闘病中の方ご本人だけでなく、そのご家族が介護のために疲れている状況を目の当たりにします。

大分ゆふみ病院は専門的緩和ケアの提供施設ですので、そのような困難な状況に対して、専門的な知識を活かしてより細やかなその人に合った手段を用い、苦痛症状や辛さを取る事に全力を尽くします。また患者さんご本人だけでなく、そのご家族の心情へも十分な配慮をする事に努めています。更に病室はすべて個室で、緑に囲まれた静かな環境の中で、心身ともにリフレッシュする事ができます。当院のスタッフは充実しており、闘病中の方のペースに合わせ、余裕をもって接しております。それに加えて、大分ゆふみ病院では、入院だけでなく、緩和ケア外来においても、がんに伴う苦痛症状で困っている方に専門的緩和ケアを提供しています。

世の中の状況が変化していく中で、専門的緩和ケアの提供施設である大分ゆふみ病院は、がん患者とその家族の支えとなるべく日々精進を重ねております。そして患者さん・ご家族にとって「ここに来て良かった」と言ってもらえるような病院を目指しています。

大分ゆふみ病院が、がんで苦しむ、患者さん・ご家族の支えの一助となれば幸いです。



## ご本人より

### 「優しさに包まれて」

伊藤 富美子

ゆふみ病院の実態は何も知らないまま見学させてもらって驚くことばかりでした。エントランスに引き続いてラウンジの豪華さは静ひつな雰囲気は漂い、まるで高級ホテルさながらでした。どの窓からも豊かな緑が一枚の絵画のように見えますし、ふんだんに木が使われた建物にはぬくもりを感じました。別天地と思える安らぎがありました。しかし、いざ入院となると不安や抵抗感は拭えません。

複雑な思いのまま病院に着くと、玄関先で笑顔で迎えられ、そのまま病室へ向かい、その後もずっと笑顔に囲まれて、不安は一瞬にして消え去りました。

寝るのも起きるのも自由で、洗面台ありトイレありの「私の部屋」での生活の始まりです。紅葉の見えるお風呂で、ゆったりと寛いだ後、浮腫のある両足のマッサージを受けるときは、至福の時間です。専門的勉強をされていて、理論に基づいたマッサージをして下さり、確実に浮腫が楽になり身軽に動けるようになりました。晴れやかな気持ちで動いています。午後には、ボランティアの方のピアノなどの演奏を聞きながらお茶を頂いて、優雅な一時を過ごします。夜には、「あーゆふみに来て良かった」と心から思いました。

一万田先生とは毎日相談できる安心感がありますし、先生のオカリナ演奏を楽しみにしているファンでもあります。また、看護師さん達のきめ細やかな心配りに助けられてばかりです。おしゃれな陶器での家庭的な食事、朝晩の熱いおしぼり、行き届いたお掃除、お風呂の間のシート交換、杖拳に暇がないほどの思いやりの積み重ねで居心地の良い環境を作ってもらっていると実感しています。入院して以来ゆったりとした時間が流れていると感じるのは、安心感と満足感があるゆえだと、ゆふみの皆様に感謝する日々です。

## Memory



Yufumi Hospital

Spring

## 春

暖かい日射しと共に鶯の鳴き声が響き渡る春。中庭の花も色鮮やかに咲き、眺める人たちを楽しませてくれます。

大好きな家族と一緒にいると心は満開！春爛漫です。



96回目のひな祭り



各部屋から眺められる緑溢れる中庭

Autumn

## 秋

澄みきった気持ちのいい空気に包まれる秋のゆふみ病院。中庭の木々も鮮やかに紅葉して美しい季節です。

キュートなうさぎさんを発見！！お月見の会では秋の歌を大合唱♪



竹灯では、ゆらゆら揺れるろうそくの灯に癒されましたね。



中庭の紅葉をかんざしにしてパシャリ！！とっても素敵です。

Summer

## 夏

中庭の小さな小径は、静かな散歩道です。風の音、鳥の声、土の匂い…。豊かな緑に囲まれて自然から力をいただけるようです。



ラウンジでのコーヒータイム。ご夫婦仲良く憩いのひととき。



一等賞 バンザイ！！



中庭の散歩道



入院当日。緑の美しさに大喜びで笑顔があふれていました。



Winter

## 冬

ラウンジの暖炉の火に包まれる当院の冬。たくさんさんのイベントも行われて人々の優しさに触れる和やかな時間です。



賑やかなクリスマス会になりました。



毎年恒例の餅つき大会！



奥様の Birthday。サプライズでのお祝い。大成功！！



お散歩デビュー！！たくさん着込んで寒さに負けずお庭を散策してきます♪

## 「今を生きる。」

森崎康江

ゆふみをでてから、今年の春で2回目の桜です。1年3ヶ月の入院生活でした。

ゆふみ病院の一番の思い出は、玄関にあるケヤキの木。私は、このケヤキの木に抱きついたことがあったらうか？入院患者さんが抱きついてたよと誰かから聞いたことがある。

入院当初、歩けていた私だったが、心の整理がつかない状態であった。はじめの頃は、立派なケヤキの木があるなあと思う程度である。歩けなくなり、車イスでこのけやきを見たいと思うようになったのは入院してから10ヶ月がたった頃であった。歩けなくなると人に会うのが嫌になり（もともとコミュニケーション能力は高い方ではない…）自室にこもるようになっていた。

看護師さんに車イスを押してもらい、ケヤキまで連れていってもらった。秋の夜に、赤や黄色のケヤキの葉が圧倒的スケールで私の目の前に現れた。それはそれは見事な光景。たぶん、ライトアップされていたのだろう。夜の黒を背景に、赤や黄色の葉をつけたケヤキが夜空を金色に照らしていた。何度か行ったことのある京都の紅葉よりはるかに神々しく心が動いた。たぶん、私の記憶している限り、人生ここまで心が動いたことはなかったであろう。

自分が息をしていること。

寒いと感じること。

話せること。

聞けること。

見えること。



毎日、太陽が東から昇り、西に沈むこと。何と当たり前前に思っていることが、本当はすばらしいことなのか。日常の一つ一つが何と愛しいことなのか。私にとって病を、死を意識しているからこそ見えてきた世界でした。たぶん、ゆふみ病院であったからこそ私に見えてきた世界だったと思われま。

- ・院長の奏でるオカリナの音色が、張りつめていた心を緩めてくれました。
- ・ともすると一人でいどんでいるかに思える臨終への時を要所所で支えてくれた先生・看護師さん達。（その当時の看護師さん全員、名前を今でも言えますヨ）
- ・毎日本当に丁寧な仕事をされるキーパーさん達。
- ・食事は温かいものは温かく、冷たいものは冷たいのです
- ・薬を手作りで練ってくれた薬剤師さん
- ・何故か落ち込みそうな時に、庭の花を摘んできてくれた私の担当看護師さんとソーシャルワーカーさん。
- ・来訪者が少なかった私にとり、ゆふみのボランティアさんにどれだけ助けられたことか。
- ・夜を守る守衛さんを見ると何故か父を思い出していました。

春はつくしにしだれ桜、夏はカエルの声に青葉、秋は紅葉にコスモス・柿の実、冬はまきストーブと雪、そして静寂なゆふみの自然、先生方等、家族・友人たくさんの方に支えられてきました。本当にありがとうございます。今は一日一日を一生だと思い今を生きています。 2017.2.2

## ■研修・施設見学受入れ状況（2016.4.1～2017.3.31）

## 研修

- 卒後臨床研修医 11名（大分大学医学部 附属病院、大分県立病院）
- 看護師研修 7名（大分大学大学院、アルメイダ訪問看護ステーション他）
- 看護学生研修 44名（大分大学医学部 看護学科）
- 薬学生研修 12名（九州保健福祉大学、福岡大学、第一薬科大学、長崎国際大学、神戸学院大学）

## 施設見学 32名

看護師28名、保健師2名、介護福祉士2名

大分大学医学部附属病院、大分県立病院、大分赤十字病院、大分医療センター、新別府病院、中津市民病院、湯布院病院、中村病院、佐伯中央病院、ほか

※入院患者さん、ご家族ともに、ご迷惑をお掛けしないよう細心の注意を払っていますのでご協力をお願い致します。

## ■ホスピス診療記録（2016.4.1～2017.3.31）

- 入院患者数 150名（男性67名、女性83名）
- 平均年齢 71歳
- 住所分布 大分市114名、大分市外36名  
（大分市外：由布市8名、別府市7名、佐伯市5名、中津市2名、ほか県内市町13名、県外1名）

## ■紹介元病院

大分大学医学部附属病院、大分県立病院、大分赤十字病院、大分医療センター、別府医療センター、アルメイダ病院、新別府病院、中津市民病院、うえお乳腺外科、大分三愛メディカルセンター、河野脳神経外科病院、吉川医院、やまおか在宅クリニック、井野辺病院、大分記念病院、大分循環器病院、大分中村病院、織部病院、ふるしょう医院、大分岡病院、南海医療センター、長門記念病院、畑病院ほか

## 入院までの流れ

## ①入院相談

電話で入院の相談を行った後、まず患者さんの容態など現状を伺います。また、入院や見学を希望の方は、来院日時のお約束をします。

## ②医師による診察面談

入院希望の方は、患者さんご本人またはご家族に対し、医師による診察と面談が行われます。また施設の見学もできます。※紹介状とX線フィルムなどを持参していただきます。

## ③入院判定会議

医師、看護師長、医療ソーシャルワーカー（相談員）によって行われます。

## ④会議の入院決定の連絡

患者さんまたはご家族に入院の適否、日程について連絡をします。

## ⑤入院

相談員、または医師が患者さん、ご家族、紹介元病院と連絡を取り、入院の調整を行ないます。

## 病院理念

### 大分ゆふみ病院は『今を生きる』患者と家族を支えます。

- 1.患者と家族の権利と尊厳を守る診療・看護を実践します。
- 2.心身の不快な症状の緩和につとめ、最善のケアの提供を目指します。
- 3.家族の不安や悲しみが和らぐように支えます。
- 4.さまざまな職種とボランティアがチームを組み、ケアにあたります。
- 5.大分県の緩和ケアの発展に寄与します。

## ご案内

入院をお考えであったり見学をご希望される方は、  
必ず電話予約をお願いいたします。

※予約をされていないと相談が重なり、対応できない場合やお待ちいただく場合がございます。

### ■入院の対象となる方

- 医師が治癒が期待できないと判断した悪性腫瘍の患者を対象とします。
- 患者と家族が入院を希望していることが原則です。
- 入院予約時に「病名・病状」について理解していることが原則です。
- 社会的、経済的、宗教的な理由によりお断りすることはありません。

### ■がん疼痛緩和外来 [要予約]

がんによる痛みやしびれなどでお困りの方、また、痛みにより眠れない方など、どなたでも直接外来受診や電話相談に応じます。専門の緩和治療医が対応いたします。お気軽にご連絡ください。※要予約

### ■在宅を希望する方

ご自宅で生活を希望する方は、必要に応じて、訪問診療医、訪問看護、ヘルパーと連携いたします。

### ■講演依頼を承ります

緩和ケア・ホスピスについてわかりやすい内容で、講演活動を行っています。お気軽にご相談ください。

### ■ホスピスセミナーを開催しています

ホスピスケアをより多くの方に知っていただくために、ホスピスセミナーを春・秋の年2回、開催しています。詳細につきましては、ホームページをご覧ください。(http://oitayufumi.com)



まず、相談窓口へお電話ください。

☎097-548-7272

電話受付時間 / 月～金曜日 AM9:30～PM4:30 (祝日は除く)

#### 交通のご案内

- バスをご利用の場合  
大分駅より大分交通<机張原>行き、  
上金谷迫停留所下車。
- 車をご利用の場合  
大分駅より車で15分、大分インターより車で5分